イントロダクション ～ 第５回　持続可能な農業を考える

今回の「あぐレポ」では、農業を仕事として始め、そして続けるために栽培作物の選定、農業者の事例などを取り上げる。

続けられる農業とはすなわち、利益を生む必要があるわけだが、単に作物を作って売るだけでは持続可能な農業は難しい。

持続可能な農業を実現するために、これから農業を始める方だけでなく、既に農業に関わっている方にとっても、ヒントになれば幸いである。

持続可能な農業を考える

持続可能な農業を考える上で、重要な要素の一つが農業生産者の収入拡大であるが、当然のことながら収入より費用が上回れば必然的に農業を続けることが困難となる。すなわち、農業を持続させるためには**「利益を生む農業」**である必要がある。

そんな持続可能な農業を始めようとする際、まずは取扱う農作物の種類に迷う方が多いのではないだろうか。

我々OKB 農林研究所には、日々多くの相談が寄せられるが、栽培する農作物の選択に関する相談が最も多い。農業をこれから始めようとする方にとっては、やはり儲かる農作物というのは最大の関心事となっているのであろう。しかしながら、他の業種に置き換えた場合、単に「スマートフォンを作れば儲かる」とか、「自動運転の自動車を作れば儲かる」とならないことと同じように、 これを作れば儲かるという絶対的な農作物がないのが現実である。

わたし自身、畑で作りたいものとして、思いっきり食べられる種無しの桃や、スーパーフードと言われるカカオを作ってみたい。また、小麦を栽培して麺を打ってみたいとも思う。現在、わたしの自宅の家庭菜園では、種無しスイカを作っているが、種が無いことで食べやすく、味も普通のスイカと比べて遜色がない。しかしながら、この種無しスイカは家族に好評ではあるが、スーパーではあまり見かけない。おそらく、世間では需要は高くないのであろう。もっとも、単にわたし自身が作りたいものを作って、家族で消費しているだけなので、持続可能かどうかを考える必要はないが、もし、これをビジネスに転換し、種無しスイカの栽培を続けるとしたら、苦境に立たされることになるであろう。

このように、農業を始めようとする人にとって、最初に訪れる選択が取扱う農作物を何にするかということになるが、その最初の選択の重要性についてお伝えするとともに、冒頭で述べたとおり、農業を持続可能にするために重要な要素について事例を交えて紹介したい。

１．イチゴとトマトという選択

岐阜県の場合、栽培する作物については、岐阜県の主要品目である、**イチゴ**と**トマト**を推奨されるケースが多い。この 2 種類の農作物は、需要が高く、値崩れしにくいなどの点で、安定収入が見込まれるからだ。

岐阜県ではイチゴの品種改良とブランディングに力を入れており、県オリジナルの品種として、1998 年に「濃姫」、2007 年に「美濃娘」、2015 年に「華かがり」が登録されている。

また、イチゴの栽培についてはハウス栽培が主流であり、近年、栽培場所の高さを腰から胸あたりまで上げる高設栽培が増え、しゃがんだ状態での作業が不要となる。そのことで、作業効率が良くなり、省力化に繋がっているが、他にも肥料などが調整された培養土での栽培、土を使わない養液栽培などによって、品質の安定、収量の向上、栽培の均一化がなされ、イチゴ栽培の技術が向上している。

次にトマト栽培について、岐阜県では岐阜県農業技術センターで開発された「トマト独立ポット耕栽培システム」を採用している事業者が多い。このシステムはトマトをそれぞれ独立したポットで栽培し、自動制御の養液を供給するものである。イチゴ栽培同様、省力化が為されており、且つ、独立していることで、病原菌の拡大を抑制することができる。

これらイチゴやトマトの栽培について、岐阜県には「ＪＡ全農岐阜いちご新規就農者研修所」、「岐阜県就農支援センター 冬春トマトの新規就農者育成研修施設」などがあり、各作物の就農研修の施設が整備されている。そのため、あらたに農業を始める方はここで栽培方法を学ぶことができる。

出典：岐阜県就農支援センターホームページ　https://gifutomato.jp/

２．株式会社クリエイティブファーマーズの取組み

実際に需要の高い農作物であるイチゴとトマトの 2 品目を生産する岐阜県の事業者「株式会社クリエイティブファーマーズ」を紹介したい。

岐阜県恵那市にある株式会社クリエイティブファーマーズは、地元で栽培が盛んであったトマトの生産を２００５年に開始した。トマトを初めて栽培するということもあり、地域の農家のアドバイスも受けながら、順調に生産能力を向上させ、徐々に栽培面積を増やしていった。そして、栽培面積の増加に伴い従業員も増えたことから、年間を通して農作物を栽培できるように、2015 年にはイチゴの栽培にも着手した。夏から秋にかけてトマトを、冬から春にかけてイチゴの生産を行い、年間を通じた生産を行うことで、農閑期を無くし、安定した収入を確保するための工夫がなされている。

2024 年 4 月現在、イチゴハウス 9 棟、トマトハウス 40 棟を運営しており、イチゴについては高設栽培で行うことで作業効率を高め、水や温度の管理は自動制御で行っている。さらに、イチゴハウス内の温度管理には薪ボイラーを利用し、燃料には地元の間伐材を用いることで、エネルギーの地産地消にも努めている。

そして収穫後の流通も、持続可能な農業を行う上で重要な要素となるが、同社で生産された農作物のうち、イチゴは主に直売所で販売され、トマトは主に市場やスーパーに出荷されて恵那市内で販売されている。生産物の全量が確立した販売先に供給される仕組みを整えたものの、やはり、どうしても発生してしまう規格外品についてはジャムやジュースなどにして活用するなど「ムダ」のない経営も実践している。

20 年近く農業に従事している石川社長は、安定収入が見込めるトマトとイチゴの生産を選択した一方で、農業は「どこでやるか」がもっとも重要であるとも話される。つまり、作物には光合成が必要であり、日照時間が数%でも短くなると収量や品質が格段に下がる。また、トマトの栽培においては低温の環境でじっくり育てると旨味の詰まった甘いトマトに仕上がるが、恵那は比較的冷涼な土地柄であるため、美味しいトマトを作るには最適な地域であるとのこと。よって、新規就農者に指導を行う場合には、栽培方法に加え、就農場所の支援も伴走して行うようにしており、作るものは興味のある作物や好きな作物で構わないが、「どこでやるか」の栽培場所に重きをおくそうだ。

３．観光農園化と CS（顧客満足度）

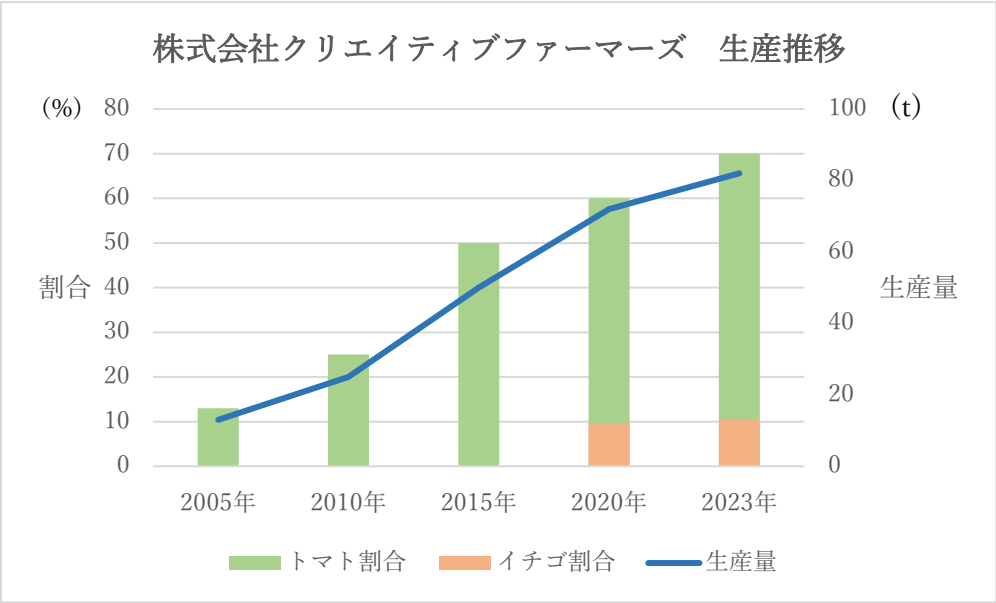
また、同社はイチゴの直売所も設けているが、その直売所を訪れる顧客の要望に応える形で、イチゴ狩りの観光農園を２０２１年にオープンした。オープン当初よりイチゴ狩りは盛況で、その相乗効果として直売所の売上を押し上げている。

イチゴ狩りといえば、繁忙時期には１レーンを数組で共有するのが普通であるが、同社では、１レーンを１組で貸切る方法を取っている。さらに、同時間帯最大でもハウス内に４組とすることで、ゆったりとした空間が確保され、落ち着いた雰囲気で、ゆっくり楽しむことができる。

観光農園を運営する場合、キャパシティの許す限り多くの予約を受け入れたくなるのが一般的であるが、石川社長いわく、「せっかく山奥まで来てもらったのだからお客様にはゆっくり楽しんでもらいたい」ということで、ゆとりのある予約受入れをしているとのこと。そのことで顧客の満足度も上がり、リピート客の増加につながっているのであろう。

このような石川社長の**顧客ファースト**の精神はあらゆるところにうかがえる。例えば、イチゴ狩りに向かう道中は、きれいに草が刈られ、そしてもちろん、ハウスの中もきれいに整備されている。ハウスに入った際には、清潔感とともにイチゴのいい香りで高揚感が得られ、隅々まで行きわたる丁寧な作業は、イチゴの栽培においても丁寧に行っていると誰しも想像ができるほどである。

満足度の高いイチゴ狩りをしたあとには、必然的にイチゴをお土産にしたくなるもので、それが盛況な直売所を作り出している。



４．まとめ

ここまで、イチゴとトマトを生産する株式会社クリエイティブファーマーズを紹介したが、石川社長は「自社の場合は、イチゴとトマトを生産するだけでなく、あらゆる工夫があって、今の経営がある」と話される。

石川社長が重視する「農作物を育てる環境」、「ゆったりとした空間作りと清潔感にあふれた観光農園」など、あらゆる工夫が持続可能な農業において必要不可欠なのかもしれない。つまり、単に農作物を作って売るということだけを考えて農業をするのであれば、どの農作物を選択したとしても持続可能な農業になりえず、むしろ作る農作物のその先の工夫が持続可能な農業になりうるかを左右することだと考える。

いま現在、栽培したい農作物が未定であるのならば、岐阜県で言えば、イチゴやトマトなどの栽培技術が確立した農作物を選択するのも一つかもしれない。また、同様に他の県においても技術や支援体制が整った農作物や、産地が形成された農作物から始めるとよいであろう。そうすることで、栽培に困ったときや、販路を見出せないときなどに支援が受けられやすく、農業を進めていく上でのヒントを身近で得られやすくなる。同社においてもトマトの産地である恵那市の地元農家の協力を得て、現在の栽培技術を確立しており、販路も地元の道の駅にもあるなど、地域のノウハウや資源、販路を十分に活用できると、事業を行う上でプラスに働くだろう。

そんな農業であるが、人の営みにおいて必要不可欠な「食」を担うものとして無くなるはずのない業種であり、老後も体が動く限り続けることができるなどのメリットがある反面、気候や農作物の病気に左右されるなど不安定な業種であるということもデメリットとして理解しておく必要がある。そのため、一喜一憂することなく、農業を持続させていくためには、「良いものを作る」、「社会や地域に貢献する」などのポリシーを持ち合わせて臨むべきかもしれない。

冒頭で持続可能な農業は**「利益を生む農業」**でなくてはならないというお話をしたが、事業を始めて即座に利益を生むことは農業に限らず他の業種でも容易なことでは無い。多くの事業者がスモールスタートで始め、試行錯誤し、持続させるためのポリシーを持ち、その先に徐々に利益を生む体制が整っていっているように思う。農業においても栽培したい作物を決めたなら、「農作物」も「経営」も焦らずじっくり育てて、様々な工夫を交えていくことで利益が生まれ、**持続可能な農業**に発展していくのだと思う。

OKB 総研　OKB 農林研究所　水野 辰哉